2025年6月22日　説教「御衣は白く光り輝き」

ルカの福音書9章28～36節

9章の前段において、イエスはペテロの信仰告白を聞いた後に、十字架の預言をされました。さらに、自らを捨てて従って来なさいとのご命令を弟子達にお与えになりました。そして、捨ててかかってこそ、真の命が得られることも伝えられました。

１．イエスの姿が変わり（28～30節）

①祈りのため山に（28）**「これらの教えがあってから八日ほどして、イエスは、ペテロとヨハネとヤコブを連れて、祈るために、山に登られた。」**

会堂管理者ヤイロの娘が生き返る出来事においても、その家に入ることを許されたのはペテロとヨハネとヤコブだけでした（ルカ 8:51）。イエスについていく道などの教えをなされてから八日ほどたち、今回もその三人をつれて、イエスは山に登られました。静まって祈るためでした。御子にして祈られるのですから、私たちが祈るべきことはいうまでもないことです。

②御顔の様子が変わり（29）**「祈っておられると、御顔の様子が変わり、御衣は白く光り輝いた。」**

さて、山の高いところで、祈っておられるとき、イエスのお姿が変貌されました。御顔は太陽のように輝き（マタイ17:2）、御衣は白く光り輝いたのです。マタイは、光のように白くなったと表現しています。マルコは、世のさらし屋ではとてもできないほどの白さであった、と記しています（9:3）。

③モーセとエリヤが（30）**「しかも、ふたりの人がイエスと話しあっているではないか、それはモーセとエリヤであって、」**

さらに驚くべきこととして、ふたりの人がイエスと話し合っていたというのです。その二人とはモーセとエリヤであったというのです。出エジプトの霊的指導者であるモーセと旧約時代の代表的預言者であるエリヤが、姿が変貌したイエスと話し合っている光景は、何か天上の出来事が地上において、映しだされているような感じがします。

２．イエスとモーセとエリヤ（31～33節）

①ご最期について話すふたり（31）**「栄光のうちに現れて、イエスがエルサレムで遂げようとしておられるご最期についていっしょに話していたのである。」**

モーセとエリヤが天上的な栄光のうちに現れて、変貌のイエスと語りあっていたのは、イエスの地上におけるご最期のことでした。すでにイエス・キリストは弟子達に、ご自分が十字架にかけられることについては預言されていました（22節）。そのことは、モーセとエリヤとの間でも話されるほどに重大なことであったからです。

②目が覚めてみた事（32）**「ペテロと仲間たちは、眠くてたまらなかったが、はっきりと目がさめると、イエスの栄光と、イエスといっしょに立っているふたりの人を見た。」**

ペテロと仲間たち（ヨハネとヤコブと考えられる）は、イエスが祈っておら

れる間、眠さが襲ってきたのです。それは、ゲッセマネの園でもそうでした。しかし、イエスの変貌の事に接すると、目がさめると、栄光に満ちたイエスのお姿と、ともにいるモーセ、エリヤの姿を確認したのでした。

③三つの幕屋を（33）**「それから、ふたりがイエスと別れようとしたとき、ペテロがイエスに言った。『先生。ここにいることは、すばらしいことです。私たちが三つの幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。』ペテロは何をいうべきかを知らなかったのである。」**

イエスがモーセ及びエリヤと別れようとする直前に、ペテロが述べたことは頓珍漢といえばそうかもしれません。それは、こんなに素晴らしい事態ですから、自分達で三つの幕屋を造って、その中に入っていただきたい、というものでした。彼なりの精一杯の願いをこめた表現ではありました。

３．雲の中からの声（34～36 節）

①雲が沸き起こり（34）**「彼がこう言っているうちに、雲が沸き起こって、その人々をおおった。彼らが雲に包まれると、弟子たちは恐ろしくなった。」**

ペテロがそんなことを言っているうちに、雲が沸き起こって、イエス、モーセ、エリヤを覆いました。そのことは、弟子達は恐ろしくなりました。雲は出エジプトの民を導くときにも用いられましたが（出エジプト記 13:21）、ここでは天上の民が天に戻されるときに用いられています。

②雲の中からの声（35）**「すると雲の中から、『これは、わたしの愛する子、わたしの選んだ者である。彼の言うことを聞きなさい。』という声がした。」**

雲の中からは、「これは、わたしの愛する子、わたしの選んだ者である」という声が聞こえました。雲はご臨在の主をも現わしていました。モーセとエリヤの出現はまさにその声をかけられた主でした。その方は、ここでイエスが主の御子であることを宣言しておられます。だからこそ、イエスの言うことに従うべきことが教えられているのです。

③見たのはイエスだけ（36）**「この声がしたとき、そこに見えたのはイエスだけであった。彼らは沈黙を守り、その当時は、自分たちの見たこのことをいっさい、だれにも話さなかった。」**

この声がしたときに、視界に映っていたのは、イエスだけでした。モーセやエリヤはどこに行ってしまったのだろう、いったいあれ何だったのだろう、などと思いめぐらされたことでしょうが、彼らはこの山上における変貌の出来事については、口にすることはありませんでした。それは、かつてモーセが神の山ホレブで、主の使いが柴の中に現れた後、神が「あなたの足のくつを脱げ、あなたの立っている場所は聖なる地である」（出エジプト 3:5）と言われたことにも相通じ、神聖なるこの時を簡単には口にだせなかったのでしょう。

《結論》　今朝もこの聖書箇所から三つのポイントで考えます。「

第一は、イエスの姿変りについてです。

イエスとは誰かというのは、この章の重要テーマの一つです。「神のキリストです。」とペテロは告白しましたが、ここでイエス・キリストがどのような方であるのかが示されました。つまり三人の弟子達を伴って、高い山に登られたイエス・キリストは、祈っておられるとその姿が変貌したのです。御顔の様子が変わり、御衣は白く光り輝いたというのです。そして、そこにモーセとエリヤが栄光のうちに現れて、イエスと話していたというのです。それはいわば、そこが一時的に天的な場所になっていたのです。イエス・キリストの復活も一定期間の天的な出来事でしたが、この山上の変貌の出来事は、三人の弟子達が地上にあって御国の前味を経験する時でありました。私たちは、この記事を読みながら、弟子達と同じようにキリストを神であり救い主であると告白していきましょう。

第二に、ここでイエスがモーセとエリヤが話したという点についてです。なぜこの二人がここに現われたのでしょう。モーセはホレブの山において、律法を神からいただく役割を果たしました。また、エリヤはティシュベ出身の預言者でしたが、神から委ねられて多くの働きをなしました。この二人はいわば、旧約聖書の時代の律法と預言を代表していたのです。キリストは、「何事でも自分にしてもらいたいことは、他の人にもそのようにしなさい。これが律法であり、預言者です」（マタイ 7:12）とか、律法の中で大切なのは何かと問われた時も、二つの戒めをあげて、「律法全体と預言者が、この二つの戒めにかかっている」と言われました。キリストはいつも神の民が歩んできた歩みを意識しておられたのです。旧約時代以来の神の民もイエス・キリストの前におかれ、交わりをさせていただいたのです。私たちも、天の恵めを、祈りや賛美をしつつ、いただいていきましょう。

第三に、三人のために幕屋を造ろうしたペテロについてです。

ペテロは、山上の変貌の出来事に感動し、イエスとモーセとエリヤのために幕屋を造ろうとしました。しかし、それは天の出来事の中に、一時的に地上の物を押し込めようとしているようなものです。地上の幕屋に天の存在に入っていただくことはできません。かつてソロモンは、神殿が完成した時に、語りました。「それにしても、神ははたして地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして、私の建てたこの宮など、なおさらです」（Ⅰ列王 8:27）。明解なメッセージでした。しかし、私たちも、ペテロと同じような発想をしやすいのです。天のものを、地上のものに入れ込もうと、考えたり、試みようとするのです。しかし、それは不可能です。人間の考えのなかに、神を押し込めようとすることも同じことです。永遠の神に豊かに働いていただくためにも、地上の力や知恵にではなく、人知をはるかに越えた神の恵みと力により頼んでいくことが大切です。そうしていこうではありませんか。